

<町史だより>



※まちの秘話⑩

各分野における調査過程の情報の一部をみなさまにお知らせします。

～東芝三重工場の中の神々～

東芝三重工場の正門から、近鉄線路側へ進むと鮮やかな朱色の鳥居が見えてきます。鳥居には「芝浦稲荷」と額が掲げられています。社殿を取り囲むように木々が鎮守の森を形成していて一瞬ここが工場内であることを忘れてしまうような雰囲気です。

境内には、「昭和十三年十月 獻燈」と刻まれた石灯籠があります。昭和13年は、芝浦製作所三重工場（当時）の創業年ですから、およそ80年間、工場や朝日町を見守ってこられたのでしょう。このような工場や会社の敷地内に祀られた神社を、企業神社・企業神などと称することがあります。もちろん、伝統的な神社と異なって、日本の近代化以降、新たに登場してきた神社です。宗教社会学の石井研士は『銀座の神々 都市に溶け込む宗教』（1994年、新曜社）の中で、急速に進んだ日本の近代化にあって、その象徴とでもいうべき会社や工場に、小祠や神社が祀られる事例を研究しています。石井によると、企業神社は、創業者の強い信念などに基づいて祀られることや、会社や工場が拠点を広げる際に、同族的・家的な意識から、本社の神社を分祀することなどをあげています。東芝の企業神社としては、出雲神社が有名です。東芝の前身である東京電機の川崎工場（旧東芝堀川町工場）の出雲神社は、1916（大正5年）頃に島根県の出雲大社から安全と繁栄を祈念して分祀された由緒を持ちます。現在は、工場跡地に作られた大規模商業施設ラゾーナ川崎プラザ内に遷座され、「ラゾーナ出雲神社」として残っています。

さて、東芝三重工場の芝浦稲荷のご由緒については、確認できる資料が思いのほか少なそうです。水谷俊晴さん（現三重工場管理部参与）によると、「（京都）伏見稲荷から勧請されたもの」と伝わっていて、現在でも、毎年2月の節分前後に、安全担当の社員などが伏見稲荷を参拝されています。前述の出雲神社とは脈絡を別にしますが、工場の安全と繁栄を祈念する点は変わりません。

境内にある石灯籠の中に、「昭和十三年十一月」と刻まれたものがあり、「寄附者 百田貞次 小林康治 海津一男」と読めます。この内、百田貞次と小林康治は、『東京芝浦電気株式会社八十五年史』（昭和38年）に名前を確認できます。特に百田は、後に芝浦製作所（当時）の会長を務める電気工学者であり経営者ですが、昭和12年に東京帝国大学より同製作所へ入社しています。入社翌年に東芝三重工場の創業に携わり、石灯籠の奉納となったのかもしれない。

安全と繁栄を祈念する姿勢は、現在でも脈々と受け継がれています。毎月1日の始業前には、安全祈願祭がたとえ雨が降ろうとも斎行されています。また、工場内の各部署にも神棚が祀られており、毎月1日と15日の始業前には、担当者によって新しい榊が供えられます。水谷さんによると、毎回用意する榊が78本ということですので、単純に2本ずつお供えするとなると、工場内に神棚が38社祀られていることとなります。芝浦稲荷をはじめ東芝三重工場の安全と繁栄を守る神々の存在は、朝日町の近代化とともに、変わる事のない祈りの価値観をも脈々と継承していらっやいます。

記：町史専門部委員・民俗部会 板井 正斉